

# Travel, Observe, and Create: Katherine Mansfield's Representation of Modern Tourism and New Zealand

大谷, 英理果

<https://hdl.handle.net/2324/4474911>

---

出版情報：九州大学, 2020, 博士（文学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏 名 : 大谷 英理果

論 文 名 : Travel, Observe, and Create: Katherine Mansfield's  
Representation of Modern Tourism and New Zealand  
(旅・観察・創作: キャサリン・マンスフィールドによる近代  
観光とニュージーランド表象)

区 分 : 甲

### 論 文 内 容 の 要 旨

Katherine Mansfield の作品は、特に 1970 年代後半以降から、実に多様な観点(モダニズム、フェミニズム、小説技法、彼女のニュージーランド性、彼女の流浪性等)から考察されてきている。Mansfield の人生は様々な空間的移動に彩られたものであり、その旅や滞在の目的も多様である。しかし、彼女が実際に行った旅と作品に描かれる旅表象を分析することはあまり行われておらず、Mansfield 研究において盲点となっている。そこで、本研究では、ヨーロッパを舞台とする女性一人旅を扱った初期作品群から、Mansfield の記憶の中のニュージーランドを舞台とした円熟期の作品群までを分析対象として取り上げ、それらに描かれる旅とニュージーランド表象を考察する。その上で、以下の2つのことについても検証する。第一に、Mansfield の女性一人旅を扱った作品群と 1907 年のニュージーランド奥地への旅が源となり創作された作品群に見られる女性の人生への関心(結婚し、夫に仕え、子供を産み育てるだけの女性の人生への幻滅)と旅行の幻滅は、自由を求め、女性に課せられた足かせを取り除くために多くの代償を払った Mansfield だからこそ、描けたものであり、既成の価値観への挑戦が潜んでいることを論証する。第二に、これらの初期作品群に見られた彼女の問題意識が、バーネル家が登場する彼女の円熟期の作品群にも旅のイメージを用いて継承されていく過程を明らかにする。

第 1 章では、Mansfield の処女短編集である *In a German Pension* (1911) に収められているドイツを舞台とした作品群を取り上げ、女性が一人異国の地に滞在することによる苦悶・幻滅・反感をいかに Mansfield が描いているのかを分析する。“Germans at Meat”と“Frau Fischer”などの作品では、Mansfield は、家父長制社会の中で形成された女性の役割を盲目的に受け入れている女性を批判的に描いているが、彼女の批判的なまなざしは、“The Modern Soul”と“The Advanced Lady”では、伝統的な価値観を実際は持っているにも拘わらず、“進歩的”で“新しい”女性を装っている女性に対しても向けられていることが特徴的である。

第 2 章では、Mansfield のその他の旅のスケッチ (“A Truthful Adventure”、“The Little

Governess”など) と E. M. Forster のイタリアを舞台とする初期作品群を取り上げ、両作家の観光表象と女性旅行者の描き方を考察する。近代観光には、それ以前の旅や巡礼の要素、つまり、分離、境界状態、再統合という三つの局面から成り立つ巡礼(儀礼)の過程も継承されている。Mansfield と Forster は、共に、近代観光の疑似イベント的な要素を批判すると共に、観光産業が観光地住民やその土地に与える負の影響を問題視している。だが、両者の観光表象における大きな違いは、Forster 作品には、精神の覚醒を経験し、成長を遂げてイギリスに戻るまでの分離、境界状態、再統合の三つの局面が描かれるが、Mansfield 作品においては、旅の分離と境界状態にのみ焦点が置かれるという点である。その理由としては、Mansfield 自身が明確な帰属意識を持っていなかったこともその一因と考えられるが、彼女の視点は一貫して、一人旅(境界状態)の女性が体験するリアルな苦悩・危険・不平等な扱い等に向けられているからであろう。

第3章では、ニュージーランドの辺境の地を舞台とする“The Woman at the Store”と“Millie”を取り上げ、当時のニュージーランド国内における性別分業に関する歴史的背景と交差させながら、二作品に描かれる女性の暮らしについて分析する。女性参政権獲得を目指したニュージーランドの初期のフェミニストたちは不平等な性別分業(「妻、母親、主婦、社会道徳の守護者」としての女性の役割)を変革することまでは目指さなかったとされている。しかし、Mansfield は、両作品において、不平等な性別分業にすでに疑問を投げかけている。

第4章では、Mansfield が描くマオリ表象について考察を行う。本章では、“How Pearl Button Was Kidnapped”と *The Urewera Notebook* に描写されるマオリの人々の記録を中心に考察していく中で、旅行中に垣間見たマオリの人々が抱える問題など Mansfield が、*The Urewera Notebook* には記録しているにも拘わらず“*How Pearl Button Was Kidnapped*”の作品内においては隠蔽したと言えるマオリ像についても分析を行い、Mansfield のアンビバレントなマオリ観を浮上させる。

第5章では、Mansfield の初期作品群に顕著であった女性の生活(性別分業)への関心、及び既存の価値観への懐疑的なまなざしが、バーネル家が登場するニュージーランドものの晩年の作品群(“Prelude,” “At the Bay,” “The Doll’s House”)の中で、どのように継続され、発展しているのかを分析する。また、これらの作品に、象徴的に、旅と非日常の表象が描かれている点も明らかにする。女性の幻滅、苦悩、不平等な扱いに主に焦点を当てて描かれていた初期作品群とは異なり、晩年のバーネル家ものの作品では、性別分業を含む既存の価値観への問題意識が継続された上で、登場人物の幻滅や苦悩だけを描くのではなく、その先にある少しの希望(既存の価値観に懐疑的な者同士のつながり)が示唆されているという解釈を提示した。

以上のように、本研究において、女性旅作家としての Mansfield の新たな側面を提示し、初期作品に描かれる既存の価値観(性別分業等)に対する Mansfield の問題意識は、旅のメタファーを使用して、晩年の円熟期の作品においても継承・発展されているということを明らかにした。